タイポグラフィ 2つの潮流 国際シンポジウム

Two Streams of Typography

基調講演

「20世紀のタイプフェイスデザインとタイポグラフィ」

講師：マシュー・カーター

日時：2013年6月28日（金）16:30～（16:00開場）

会場：武蔵野美術大学 美術館ホール

参加方法：当日10:00より美術館受付にて整理券を配布します。（1名様につき1枚）

パネルディスカッション

「自国のタイポグラフィと欧文タイポグラフィの関係」

日時：6月29日（土）16:30～（16:00開場）

会場：武蔵野美術大学 美術館ホール

参加方法：当日10:00より美術館受付にて整理券を配布します。（1名様につき1枚）

パネリスト：安 尚秀（アン・サンス）、王 敏（ワン・ミン）、新島 実

コーディネーター：寺山祐策

日本、中国、韓国。漢字文化圏に属する国々のタイポグラフィデザインは、それぞれの表記体系に基づく独自の世界を作り上げている。またタイプフェースの設計基準が全角による漢字文化圏のタイポグラフィとプロポーショナルな欧文タイポグラフィの世界では、良質なタイポグラフィデザインの結果を得る為には、独自の造形操作と美意識が要求される。異なる設計基準から作り出されたタイプフェースを、漢字文化圏に属するタイポグラファーは、「混植」あるいは「併記」という形で、全角をベースにした空間に取り込んでいる。

今回のシンポジウムでは「全角とプロポーショナル」、この複雑なタイポグラフィデザインをそれぞれどのように考え、問題を解決しているのか、中国、韓国からの専門家を交えて、漢字文化圏のタイポグラフィデザインを考えます。

助成：公益財団法人 吉野石膏美術振興財団

シンポジウム登壇者プロフィール

マシュー・カーター氏 プロフィール

ロンドン生まれ。書体デザイナー。父のハリー・カーター（Harry Carter 1901－1982）も書体デザイナーとして有名。1956 年にオランダの活字鋳造所ヨハン・エンスヘーデでパウル・ラディッシェにパンチカット技術を学ぶ。1960 年代初めにクロスフィールド・エレクトロニクス社にタイポグラフィ・コンサルタントとして入社。マシュー・カーター氏は手作業によるパンチ文字からコンピュータ・フォントまで書体に関するあらゆる技術を駆使した仕事をしている。1965 年ニューヨークへ移住し、マーゲンターラー・ライノタイプ社に 1981 年まで務める。ライノタイプ社の仕事のうち、ベル電話会社のために Bell Gothic 書体をベースに文字を小さくして電話帳の印刷においてもインクで字が滲まないように設計した「Bell Centennial」は有名。1981 年に友人マイク・パーカーとビットストリーム社を設立し、その後、1991 年にはシェリー・コーンと「カーター＆コーン・タイプ社」を設立する。ここでは「Sophia 書体」を設計し、1993 年 TDC 年鑑一般部門金賞を受賞する。カーター氏は書体の可読性を重視し、アップルコンピュータとマイクロソフトのために「Georgia」「Verdana」の 2 書体を設計した。

アン・サンス氏 プロフィール

韓国を代表するグラフィックデザイナー。1981 年ソウルの弘益大学を美術学士号、修士号を取得し卒業、1996 年漢陽大学で博士号を取得。2001 年キングストン大学（イギリス）よりデザインの名誉博士号を授与。1991 年、母校・弘益大学においてタイポグラフィ、エディトリアル・デザインの教授を務める。ICOGRADA 副会長（1997−2001）、韓国視覚情報デザイン協会会長（1999−2000）を務める。2000 年 ICOGRADA 特別会議 Oullim やソウル・タイポジャンチ 2001、および 2011 を成功させる。1985 年には総合グラフィックデザイン会社であるアングラフィックスを立ち上げ、彼の名前を付けた「アンサンス体」も発表してハングル書体の多様化を示した。各国で個展やグループ展を開催、審査員を務める。1998 年には Zgraf8 のグランプリを受賞。タイポグラフィ、ブックデザイン、文化ポスターなどを主に手がけるほか、ハングル文字の新しいタイプフェースを開発。韓国固有の文字であるハングルの子音と母音を組み合わせて一文字を形作るハングル特有の文字をデザインする。2013 年には独創的なデザイン教育を掲げて自らの専門学校「PaTI」を設立し、若手の育成に尽力している。AGI 会員。

ワン・ミン氏 プロフィール

中国・北京にある美術デザイン系大学の最高峰である中央美術学院（China Central Academy of Fine Art、CAFA）のデザイン学院長。北京に設立した「Square Two Design」のデザイン・ディレクター。中国の美術大学で教鞭をとった後、ヨーロッパやアメリカに留学、イエール大学大学院ではポール・ランドやブラッドベリ・トンプソンらアメリカのグラフィックデザイン界の巨匠等に師事し、在学中の 1986 年アドビ・システムで初代マッキントッシュ・コンピュータの導入とともにデジタル革命を手がけた。学位を取得後、1997 年までイエール大学でグラフィックデザインの教鞭を執る。その後 1998 年から Adobe Systems 本社（サンフランシスコ）においてデザイン・マネージャー、シニア・アートディレクターを務めた後、中国に帰国、現在にいたる。ワン氏の作品の特徴は現代的な西洋のデザインと伝統的な中国アートの融合にあり、世界各地のさまざまな展覧会で公開されている。また、国際コンペの審査員を務めるなど、現代中国のグラフィックデザイン界の最先端で活躍する第一人者。近年の顕著な仕事に、2008 年第 29 回北京オリンピックのデザイン総合ディレクターとして歴史的な国家プロジェクトのプロデュースで知られている。AGI 会員。

新島 実教授 プロフィール

武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科教授。米国イエール大学大学院修了。グラフィックデザイナー。イエール大学ではグラフィックデザイン界の巨匠ポール・ランドやブラッドベリー・トンプソン等に師事し、グラフィックデザインとタイポグラフィを学ぶ。研究テーマは、ポール・ランドの視覚意味論を中心としたグラフィックデザインの考察と表現、およびタイポグラフィデザイン。大学では教科書『graphic design ／視覚伝達デザイン基礎』（武蔵野美術大学出版局）を監修し、教鞭を執る。主任教授として 2009 年より研究室を代表する。グラフィックデザイナーとして 1991 年「New Japanese Graphics 展」（デザインミュージアム・ロンドン）をはじめ、2003 年「新島実展：色彩とフォントの相互作用」（ギンザ・グラフィック・ギャラリー）、2007 年「国民文化祭とくしま」のグラフィックデザインのディレクションと制作、2010 年「タイポグラフィデザイン 4 人展」ポーランド、ウッチ・シティアートギャラリーなど、数多くの展覧会やイベントへ参加する。タイポグラフィデザインと視覚意味論をベースに、ヴィジュアルコミュニケーションデザイン教育のシステム作りを推進する。AGI 会員。

寺山祐策教授 プロフィール

武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科教授。グラフィックデザイナー。武蔵野美術大学大学院修了。研究領域は視覚記号論、近代グラフィックデザイン史。ヴィジュアルコミュニケーションの可能性をライティングスペース（Writing Space）の観点から捉え直し今日的なデザインのあるべき新しいかたちを理論と実践の双方から研究を続ける。1992 年と 1996 年に米、仏、英国のデザイン研究機関と教育現場視察を経て、勝井三雄とともに身体と知覚、人類のコミュニケーション史の捉え直しを目的とした Writing Space Design の教育カリキュラムを開始する。2008 年より本学在外研究員としてクロアチアを拠点としてヨーロッパに 1 年間滞在。編・著書として『ヴィジュアル・コミュニケーション・デザイン・スタディ』（視覚伝達デザイン学科研究室）『エル・リシツキー　構成者のヴィジョン』（武蔵野美術大学出版局）『graphic design　視覚伝達デザイン基礎』（武蔵野美術大学出版局）（共著）『世界の表象　オットー・ノイラートとその時代』（武蔵野美術大学美術資料図書館）等。またデザイン・ワークとして『ギブソン心理学論集』（勁草書房）『DOCOMOMO 20 JAPAN 文化遺産としてのモダニズム建築展』（神奈川県立近代美術館）など多数。さらに海外の教育機関における講演など幅広い教育研究活動を進めている。